

実施報告書

1/2 取組みに関する基本情報

◆ 基礎情報

計画名	地方再生の一翼を担う集落環境整備～「こいでの家」利活用プロジェクト
実施責任者	建築・デザイン学部 建築・デザイン学科 古賀大
対象者	建築・デザイン学科 3・4年生11名
実施期間	2025年4月～2026年2月

◆ 取組み概要

- ・「地方再生」が重要政策となる時代にあって、『大地の芸術祭』で有名な越後妻有地区で、都会の学生が通年で地域住民や観光客と交流することは多くの可能性と波及効果が期待される。2007年以来、東京電機大学と本学（現・古賀ゼミ3・4年生）が共同で、地域住民と毎年の活動を通してお互いに必要とされる関係に発展させてきた。活動当初は芸術祭参加団体として、近年では古民家をイベントの場として活動を深化させている。
- ・①独自のイベント企画、②古民家会場の整備、③集客のために広報活動、④地域住民と交流深化、を重要な活動目標とする。これら《4つのグループワーク》において一人ひとりの役割を確認し、全員参加で実現をめざす。
- ・堀啓二先生の指導の下、フィールドワークを通じて協働して課題を解決する活動は、本学がめざすリーダーシップ開発の場として成長してきた。

◆ 取組み全体の流れ

- ・例年通り4月～8月を中心に、両学による全体会議を6回、現地への事前訪問を3回実施。
- ・8月末に準備・片付けを含めて5日間のイベントを実施。
本年のイベント企画、ストリングアートと草木染めのワークショップは来訪者の好評を得た。屋外広場には昨年同様にタープを張った仮設イベント会場を設営。
古民家整備では、繊細な木格子を建物内外に設置し、伝統空間と現代デザインを融合。
広報活動ではかわら版やポスター類を駆使し、入場者数の拡大を図った。
- ・地域交流では、新たに地域住民所有の田畠を俯瞰する模型を作成し好評を得た。
- ・古民家所有者から建物老朽化に伴い11月に解体することが、夏前に通告された。
急遽、古民家の思い出について近隣住民ヒヤリングを実施し、その展示を立案した。
第5のグループワークとして展示活動を加えて、多くの住民が駆けつけてくれた。
- ・10月下旬に18年間の活動で備蓄した資材・道具類を整理し、OBOGとともに解体式典を実施。

◆ 取組みの成果

成果物は以下リンクの通り。

- ・共立リーダーシップGP2025活動報告書
https://drive.google.com/file/d/1tuu8xZcpeAMgt5UbyXTY3nJDeNx0J_C/view?usp=sharing
- ・「こいでの家」活動報告－協働活動を通したリーダーシップの育成＋活動動画
https://drive.google.com/file/d/1TWAzdUvDaDijpGUUG66kEzJfHLvoM_ZX/view?usp=drive_link

実施報告書

◆ リーダーシップ教育に関する実践

共立リーダーシップの意識づけ、目標設定の活動

- ・活動開始にあたり、東京電機大学TDUにもリーダーシップGPの趣旨と目標を説明。
- ・本学学生はループリックで目標設定を行い、活動後に達成度確認のできる態勢を整備。
- ・協働活動では、「率先垂範」「相互支援」「包容性」を意識して活動を開。

協働活動

- ・ループリックにある3つの協働活動の面での具体的な内容は下記の通り。「率先垂範」では、本学4年生が地域住民ヒヤリング、展示制作を、本学3年生が《4つのグループワーク》への参加に加えて、古民家模型の改修、周辺農地模型制作を主体的に行いました。TDU生や地域住民の関心事を理解し、対等に意見交換することでコミュニケーションが深化したと評価できる。

「相互支援」では、《4つのグループワーク》に分散参加し、TDU生との密接な共同作業を実施。

古民家整備では、コンペ後の提案擦り合わせで意見対立もあったが、木格子と草木染を上手に合体させた空間が完成した。対話のチャンネルを開き続けることで相互理解が深まるごと、「包容性」の重要さを実感できたと評価できる。

共立リーダーシップの観点での振り返り

【行動確認シート】で、4つの目標を設定。

【チームの方針やルール】で、皆で解決すること、情報はわかりやすく伝えること、対面重視で意見交換すること、を確認。

【チーム振り返りシート】で、メンバーの考えを文字表現の上で協議。2月中旬にTDU生と最終的な振り返りを行う。

◆ 学生の成長に関する総括

- ・活動開始当初、チーム内の顔色を窺いながら発言をする様子が見られた。これは全体合意への理解に自信がないために過剰に慎重な行動をとっていたためと思われる。しかし、対話のチャンネルを開き協働作業時間を重ねるにつれて、全体合意事項への理解も深まり、自信をもって発言がされるようになった。
- ・チーム内での発言に積極性が増すことで、草木染から発展させた展示は木格子と調和した優れたデザインに昇華し大きな見せ場になった。

◆ 取組みを通した全体の所感

- ・昨年の活動と比較すると、イベント企画、古民家整備、広報活動、地域住民と交流の《4つのグループワーク》は優れた成果を挙げた。古民家解体の決定後は、急遽、近隣住民ヒヤリングを基にした展示にも注力し、活動全体の魅力を高めた。
- ・古民家解体という想定外の事象に柔軟にイベントを変更し、チーム編成を工夫することは、問題解決力が試されるもので、計画性を上回る能力が發揮された。

◆ 今後の展開

- ・過去18年間、古民家で活動を続けてきたことから、解体に伴い活動の継続が危ぶまれる事態になっている。地域住民の高齢化も進み、ある段階で活動の節目を考える必要がある。
- ・一方で、地域住民からは活動継続への希望の声も聞かれ、学生間で活動継続を前提に真剣な議論が続いている。2026年以降の活動の準備は3月初旬から始める予定である。